

# 日本ケミファが医薬品共同物流に参画 拠点分散と脱・路線便で安定供給維持

医薬品メーカーの日本ケミファが新たに大塚倉庫の医薬品共同プラットフォームに参画した。在庫拠点を従来の関東1拠点から東西2カ所に分散、BCPを強化して西日本のリードタイムを短縮した。同時に、路線便から医薬品専用の共同配送便に切り替えることで輸送品質を向上し、安定供給の維持を図った。  
(本誌編集部)

## 「ID倉庫」でアイテム増に対応

10月に日本ケミファは大塚倉庫の医薬品専用センター「西日本ロジスティクスセンター」(神戸市)に入居し、西日本の物流業務を委託しました。まずは日本ケミファの事業概要から。

日本ケミファ 小山 剛 取締役常務執行役員「当社はもともと高尿酸血症や疼痛などを得意領域とする新薬メーカーですが、2000年にジェネリック医薬品(後発医薬品、以下「ジェネリック」)に進出しました。政府がジェネリックの普及促進策を打ち出す前のことで、新薬メーカーで本格的に手を広げたのは当社が初めてでした。現在は当社の売り上げの約9割をジェネリックが占めています。その後、他の新薬メーカーもこぞって参入しましたが、開発から製造、販売までの全てを自社グループ内で一貫して手掛けているのは当社の他にほとんど例がありません」

——ジェネリック中心に事業構造を改革したことで、物流にはどのような変化があったのでしょうか。

日本ケミファ・小山「一つはアイテムの急増です。新薬だけなら10品目×規格×包装パターン程度で済んでいたものが、現在は500以上のSKUを取り扱っています。毎年2回、新しいジェネリック医薬品が薬価基準に収載されるたびに、アイテムが増えています。しかも、新薬の出荷は梱包単位ですが、ジェネリックは注文ロットが細かく、一つの箱に

何アイテムも詰め合わせなければなりません。それだけ出荷作業に手間と時間がかかるようになりました」

「物量もこの4〜5年で2倍近くに増加しています。その結果、倉庫スペースの不足と共に、輸送力の安定確保が課題になってきました。とりわけ世間的にトラック不足が騒がれるようになってからは、繁忙期に路線会社が集荷を拒否されたり、集荷に来ても積み残しが発生したり、あるいは遅延や誤配が増えるなど、輸送品質の問題も目立ってきました」

——大塚倉庫は日本ケミファにどのようなアプローチしたのですか。

大塚倉庫 濱長一彦 代表取締役社長「当社が運営する医薬品の共通プラットフォームに参画してもらいたいメーカーを検討していく中で、日本ケミファ様に注目し、提案の機会を頂きました。当社は大塚製薬の輸液をベースカージとし、全国翌日配達を行っています。輸液は、かさの張る製品で物量も膨大です。軽くて小さい治療薬と共同化すれば大きなシナジーを期待できます。しかし、新薬メーカーは売上高に占める物流コストの比率が小さいため、経営層はそれほど物流を意識していません。それに対してジェネリックは単価が安く、アイテム数が多いので売上高物流コストが高い。経営層も物流を意識せざるを得ません。有効な提案をすれば耳を傾けてもらえる」

日本ケミファ・小山「確かにジェネリックのメーカーにとって物流は大変悩ましい問題です。先ほども申し上げたように、輸送品質の



日本ケミファ 小山 剛 取締役常務執行役員 (左)  
大塚倉庫 濱長一彦 代表取締役社長 (右)

問題で得意先様にご迷惑をおかけすることが増えてきたことに加え、日本でも近く『PIC/SIGDPガイドライン』(医薬品の保管・輸送に関する国際的な適正流通基準)に基づく国内ガイドラインが発出されることになり、医薬品物流の品質管理は今後いっそう厳格化していきます。それに伴いコスト増も予想されます。従来の物流体制でいいのかという問題を経営レベルで検討していたところでした」

——日本ケミファの従来の物流体制は？

日本ケミファ・小山「ずっと自社で運営していたのを2004年に外部委託に切り替えました。埼玉県春日部市の物流センターを介して、そこから全国に路線便で納品する体制です。そのため北海道、九州、四国、山陰は翌々日の納品になります」

——大塚倉庫の具体的な提案内容は？

大塚倉庫・濱長「在庫の分散です。私自身2度の震災を経験して痛感しましたが、医薬品物流で重要なのは安定供給です。1拠点体制ではそこが止まれば「お手上げ」ですが、在庫を分散していれば出荷が継続できる」

日本ケミファ・小山「実は大塚倉庫さんと接触する前から、われわれも拠点の分散を念頭に置いて、医薬品に実績のある物流企業を調べたり、話を聞いたりしていました。そのため提案はよく理解できました。配送も医薬品に特化した共同配送であればGDPガイドラインへの準拠などの品質面でも安心できるし、国内No.1シェアを誇る大塚製薬の輸液の配送網ならコスト面でも期待できる。すぐに物流部門のスタッフに大塚倉庫さんについて調べさせたところ、ジェネリックの取り扱い実績もあり、多品種少量の出荷作業にも問題なく対応できそうだという感触を得ました」

大塚倉庫・濱長「そこは当社の『ID倉庫』が活躍します。タブレット端末の指示に従うだけで、誰でもその日から作業ができる仕組みがあります。アイテムが増えても処理量に合わせ作業員を確保すれば対応できます」

## コネクティッド・ロジスティクスへ

——荷主として今後、大塚倉庫に何を期待しますか。

日本ケミファ・小山「物流品質の向上です。端的には残荷や遅延が少なくなること。大塚倉庫さんが大手医薬品卸と進めている協業に

もメーカーとして一緒に取り組んでみたい。ジェネリックは他社との差別化が難しい上、参入社は増え続け、競争は厳しくなる一方です。そこで物流品質を差別化手段の一つにできないか、大塚倉庫さんにサポートをもらい検討していきたいと考えています」

大塚倉庫・濱長「例えば先日は医薬品卸向けに通い箱を導入しました。当社はグループだけでメーカーが3社あり、1ケース未満の注文は各社ごとのケースに分け、空間に緩衝材を詰め納品しています。それを一つの通い箱にまとめることで輸送費、荷受け作業、緩衝材等無駄が省けます。そうしたことを日本ケミファさんはじめメーカーに提案していきたい」

「また物流品質についても、当社の『ID運輸』でリアルタイムの運行状況を把握し、仮に遅延が発生した場合でも、事前にそのことを荷主や納品先に伝え対策を打てればダメージを最小限に抑えられる。荷主や納品先、配送パートナーと常に「つながっている」ことが大切だと考え「コネクティッド・ロジスティクス」を新たなキーワードと位置付けています。そのためICTの整備を業界に先駆けて進めていきます」

### 日本ケミファ株式会社

東証1部上場の医薬品メーカー。主力品は痛風薬「ウラリット」、鎮痛薬「ソレトン」など。売り上げの9割を後発医薬品が占める。

### 大塚倉庫株式会社

大塚グループの物流子会社。食品、日用品、医薬品を対象にメーカー物流を業界ごとに共同化する共通プラットフォーム戦略で急成長を遂げている。